

2 0 2 5 年度
年 次 報 告 書

I. 公益活動

1. 青年活動振興事業

1) 第 73 回全国青年大会

全国青年大会は、サンフランシスコ講和条約発効を記念して 1952（昭和 27）年に第 1 回大会が開催され、以来、勤労青年のスポーツ、文化活動の発表と技能向上の場として、全国の青年団が中心となって毎年東京で開催しています。この大会は、一部の種目を除き国民体育大会や国際競技会などに出場した経験のある選手には参加資格がなく、地域で地道にスポーツや文化活動に携わっている青年が参加する大会です。地域のスポーツ、文化活動の裾野を広げ、より多くの青年たちに活躍の場を提供するとともに、全国から集まった青年たちの交流と友好を深めることにも重点を置いて、平和で文化的な住みよい地域づくりを目的にこれまで事業を実施してきました。



第 73 回全国青年大会は 11 月 7 日（金）から 10 日（月）にかけて開催しました。今年も、開会式に瑤子女王殿下のご臨席を賜った他、中村裕之文部科学副大臣にもご出席をいただきました。

今大会は、体育の部のバスケットボール、軟式野球、剣道、フットサル 4 種目と、芸能文化の部の写真展、生活文化展、意見発表、舞台発表 4 種目の計 8 種目を実施し、大会参加者数は 1,105 名と、昨年度より 165 名増加しました。特にバスケットボールと軟式野球では、それぞれ約 100 名の増となりました。交流企画として実施した外苑マルシェでは、昨年引き続き能登半島地震復興支援の一環として、各地から持ち寄ったお菓子を詰め合わせたセットを 300 円で販売したところ、用意した 141 セットが完売し、売上げの 42,300 円を全額石川県団に贈呈しました。

2) 全国地域青年「実践大賞」

「全国地域青年『実践大賞』」は、全国の優れた青年活動の取り組みに学びあい、それを顕彰するもので、全国の青年団や教育委員会などを通じて応募を呼びかけています。今年度は 7 県 13 件の実践の応募があり、昨年度より 2 県 16 件の減少となりました。受賞した実践は下記のとおりです。

<大賞>

土佐市青年団

「世代交流食堂なぶらっこ」プロジェクト

■実践概要

地元で長年愛されながらも閉鎖の危機にあった地域食堂を、土佐市青年団が引き継ぐ形でスタートした実践です。単なる食事提供の場に留まらず、多世代が「なぶれる（群れる）」居場所づくりを目的としています。

活動にあたっては、団員が近隣農家や企業を回り、廃棄予定の食材提供を呼びかけるなど、地域を巻き込んだ運営体制を構築しました。また、料理が得意なメンバーによ

る「チームクック」の結成や、大学生・高校生ボランティアとの連携により、多世代が交流できる空間を演出しています。さらに、地域おこし協力隊と協力した「パパママカフェ」の同時開催や季節のイベント企画を通じ、子どもから高齢者まで120名以上が集う、地域の新たな拠点として定着しつつあります。

<田澤義鋪賞>

高知県青年団協議会

「高知家モリモリプロジェクト～竹編～」

■実践概要

森林率全国1位の高知県が抱える「放置竹林」問題に着目し、若者が主体的かつ手軽に環境保全に取り組めるよう立ち上げられた実践です。従来の木材伐採よりも参入障壁が低い「竹」を対象とし、若手チーム「伐採チームヒガサス」を結成しました。

活動では、チェーンソー講習を受けたリーダーを中心に、放置された竹林の整備を行い、景観の改善や防災機能の向上に寄与しています。整備後の竹を活用した「竹ごはん炊き出し体験」を親子向けに実施するなど、社会教育団体としてのノウハウを活かした啓発活動も展開しました。地域住民からの感謝の声が若者のやりがいとなり、現在では口コミを通じて県内各地から整備依頼が寄せられるなど、地域とのダイレクトな繋がりを生む高知県団の新たな柱となっています。

<全国青年団OB会奨励賞>

西米良村青年会

「第29回新春やまびこロードレース大会」

■実践概要

宮崎県で最も人口の少ない西米良村において、村内外の交流促進と活力ある村づくりを目的として開催されている伝統ある大会です。国道を全面通行止めにし、白バイが先導する本格的なコース設定が特徴で、自然豊かな村内を駆け抜ける魅力的なイベントとなっています。

今年度はメディア戦略の強化に加え、金メダリストの谷口浩美氏をゲストに招くことで、参加者数が昨年度の3倍となる約200名へと大幅に増加しました。青年会員は、大会の企画・運営から豚汁の振る舞いまで、少ない人数ながらも工夫を凝らして活動しました。村外から訪れた多くの子どもたちや若者の姿が、高齢化が進む村民に活力を与えるとともに、次世代へ郷土愛を繋ぐ貴重な機会となっています。

3) 北方領土返還運動

(1) 第56回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会の開催

日本青年団協議会は1966(昭和41)年より北方領土返還要求運動に取り組み、1970(昭和45)年より婦人会の全国組織である全国地域婦人団体連絡協議会(現・全国女性団体連絡協議会)とともに、北方領土を望む納沙布岬での視察、北方領土問題の学習、元島民の返還への思いを聞くなどの内容で、北方領土復帰促進婦人・青年交流集会を開催してきました。

今年度は2025年7月19日～21日にかけて標記集会を現地にて開催し、62名が参加しました。今回は、プログラムのほとんどを標津町や羅臼町など根室市周辺の自治体

で行い、元島民や地元漁業者からの講話のほか、地元料理づくり体験を通した女性会との情報交換を行いました。また、船上視察ではロシアとの中間地点まで接近し、国後島を臨むことができました。

4) 国際交流事業

日本青年団協議会は 1956（昭和 31）年より中華全国青年連合会（全青連）と交流を行っています。また、韓国青少年団体協議会（韓青協）との交流は、2012 年に（社）中央青少年団体連絡協議会（中青連）の解散を受け、中青連事務局機能の役割を担う日本青年団協議会が韓青協との交流事業を 2015（平成 27）年から承継し実施しています。

全青連との交流では、2025 年 7 月 15 日～17 日にかけて北京で行われた「世界青年発展フォーラム」に全青連から招聘を受け参加しました。テーマ別フォーラム「文化遺産の保護と継承」内にて、青年がどのように各地の無形文化を後世につなぐため取り組んでいるか、その役割や意義について、日本の文化が育んできた和の精神や地域に根付くさまざまな祭りをテーマに発表しました。ほかにも、各国の若者によるグループワークにおいては「多文化共生」の活動を紹介しました。

韓青協との交流では、2025 年 12 月 3 日～6 日にかけて韓国・ソウル市内および京畿道坡州地区を訪問しました。韓国では青少年育成が国家的施策として推進されており、訪問した各施設はいずれも最新の設備と高度な学習環境を備えていました。対象年齢は 9 歳から 24 歳までと幅広く、国の支援を受ける施設については無料で利用できる体制が整えられています。

これらの施設は全国に約 360 か所設置され、共働き家庭における放課後の居場所としての役割を果たすとともに、学校区を越えた青少年同士の交流の場としても機能しています。このほか、戦争記念館および DMZ（非武装地帯）を訪問し、朝鮮半島の歴史的背景と現在の情勢について理解を深める機会ともなりました。

5) 平和活動

2025 年は、広島・長崎への原爆投下から 80 年という節目の年です。日青協は、この年を「記憶を受け継ぎ、次の世代へとつなぐ」大切な機会ととらえ、他団体と力を合わせた取り組みと、日青協ならではの学習活動の両面から、平和について考える場を積極的につくりました。

(1) 全国の仲間とともに学ぶ取り組み

被爆・戦後 80 年を機に、全国各地の道府県青年団でも平和に関する独自の活動が広がりました。地元の戦跡を実際に訪れる事業や、地域に残る戦争の記憶・証言を掘り起こす活動、戦争展の開催など、それぞれの地域に根ざした形で「記憶をつなぐ」取り組みが実践されました。日青協の諸会議・諸事業においても原爆パネル展を継続的に実施し、全国の道府県団役員がこれに触れ、あらためて平和について考える機会をつくりました。

日青協独自の学習事業として、年 3 回の平和学習会を企画しました。第 1 回・第 2 回はオンラインで開催し、各回 15～20 名が参加しました。第 3 回は沖縄県青年団協議会の主催事業と連携し、現地での「平和集会 in 沖縄」として実施しました。県内外から合計 51 名が参加し、集会に先立つオンラインでの事前学習会もあわせて行うことで、

参加者がより深く学べる場をつくりました。沖縄に暮らす青年と県外から集まった青年が共に現地を歩き、それぞれの立場からの見解や思いを率直に交わすなど、「学んだことを自分の言葉で語る」ことを大切にしたいプログラムは、参加者が平和について深く考える機会となりました。

(2) 様々な団体と連携・連帯した取り組み

2024年にノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）との連携しながら、10月11日、東京・有楽町朝日ホールにおいて「核兵器も戦争もない世界を求めて～記憶を受け継ぎ未来へ～」と題した集会を開催しました。日青協は日本生活協同組合連合会（日本生協連）や（公財）第五福竜丸平和協会などとともに実行委員会の事務局を担いました。当日は会場300名・オンライン50名が参加しました。若い世代による朗読劇の上演や、日本被団協事務局長の濱住治郎氏による講演を通じ、被爆者の「ふたたび被爆者をつくらない」という願いを受け継ぎ、核兵器禁止条約の批准を求める声を若い世代がつかないでいく責任をあらためて確認する場となりました。

また、ピースボートなどと連携し、平和に関するリレートーク集会を開催しました。会場とオンラインを合わせて約600名が参加しました。

2. 民俗芸能の保存と継承

1) 第72回全国民俗芸能大会の開催

日本で初めて地域の芸能を舞台で紹介したのが1925(大正14)年に初代日本青年館のこけら落としとして開催された「郷土舞踊と民謡の会」でした。以来、これまでに460余の芸能を紹介してきました。また、早くからこうした芸能の記録保存に取り組んできたのも当大会です。

2025年度の第72回全国民俗芸能大会は、11月22日、全国民俗芸能保存振興市町村連盟との共催事業として開催しました。大会の概要は以下の通りです。

ー第72回全国民俗芸能大会出演団体ー

南津島郷土芸術保存会（福島県双葉郡浪江町）

鷺宮催馬楽神楽保存会（埼玉県久喜市）

海名野神明神社式三番叟保存会勇義社（静岡県賀茂郡西伊豆町）

立間鹿の子保存会（愛媛県宇和島市）

ータイムスケジュールと演目ー

12:00	開場
13:00～13:30	開会・表彰
13:30～13:55	①愛媛県 吉田祭のお練り行事の鹿踊（鹿の子）
13:55～14:40	②埼玉県 鷺宮催馬楽神楽
	第2座 天心一貫本末神楽歌催馬楽之段（通称：櫛）
	端神楽
	第11座 鎮悪神発弓靱負之段（通称：鎮悪神）
	ー休憩ー 15分
14:55～15:40	③福島県 南津島の田植踊り
	田植踊／神楽・岡崎
15:40～16:30	④静岡県 海名野神明神社の人形三番叟
	千歳の舞／翁の舞／春の舞／問答／鈴の舞
	ー休憩ー 60分
17:30～19:00	特別公演
	静岡県 「伊豆の人形三番叟」
	出演団体：神明神社式三番叟保存会勇義社

2025 年は 1925 年の青年館ホテル・ホールの開館から 100 年の記念の年にあたりました。当時、開館記念事業として行った「郷土舞踊と民謡の会」のプログラム表紙展示（1925 年～1936 年分）や、第 70 回大会の芸能スケッチ記録展など、演目以外の取り組みも行い、貴重な資料や記録を活用する機会となりました。毎年発行している雑誌『民俗芸能』103 号では、出演芸能の解説に加え、同会の表紙を掲載したルーツを紐解く特集ページを組みました。



海名野神明神社の人形三番叟

アンケートも観覧者の約 2 割の方から回答をいただき、写真撮影の可否や休憩時間の長さなどにご意見をいただいた一方で、有料公演への理解や上演芸能への高い満足度も伺えました。また、出演団体からも大会参加が大きな励みになっているとの声が寄せられています。帰宅困難地域となっている福島県南津島郷土芸術保存会では、休止している演目の再開に向けた気運が高まっており、静岡県の海名野神明神社の人形三番叟は NHK・E テレ「芸能きわみ堂」で紹介されるなど、地域の歴史と現在を繋ぐ民俗芸能が反響を呼んでいます。

大会の観覧者は 500 名余と昨年とほぼ同数でした。これまでの観覧者の方が高齢化する中で、今後は若年層や新規ファンの獲得が課題となっています。

—企画委員—

- ・齊藤 裕嗣（前文化庁伝統文化財課主任調査官）
- ・俵木 悟（成城大学文芸学部教授）
- ・神田 竜浩（（独）日本芸術文化振興会企画部日本博事務局文化事業広報第一課課長）
- ・久保田裕道（（独）国立文化財機構 東京文化財研究所無形民俗文化財研究室長）
- ・伊藤 純（川村学園女子大学講師）
- ・高久 舞（帝京大学文学部日本文化学科講師）
- ・吉田 純子（文化庁文化財第一課芸能部門 主任文化財調査官）
- ・中山千紗子（文化庁文化財第一課芸能部門 文化財調査官）
- ・橋本かおる（文化庁文化財第一課芸能部門 文化財調査官）

3. 月刊誌社会教育の発行

1) 特集内容

「社会教育」の発行は、下記のような内容・発行部数で毎月発行しました。

（普通号 定価 968 円：本体 880 円 増大号 定価 1,485 円：本体 1,350 円）

- 4 月号(946 号) 特集 おとなの学びと国際潮流 世界の生涯学習（普通号 968 円）80 頁
- 5 月号(947 号) 特集 社会教育事業開発の視点（普通号 968 円）80 頁
- 6 月号(948 号) 特集 社会教育事業開発の視点（2）（普通号 968 円）80 頁
- 7 月号(949 号) 特別企画 社会教育実践研究センター ～設立 60 周年を迎えて～
（普通号 968 円）84 頁
- 8 月号(950 号) 特集 創刊 950 号（増大号 1485 円）120 頁
- 9 月号(951 号) 特別企画 東京 2025 世界陸上開催とスポーツの魅力
（普通号 968 円）80 頁
- 10 月号(952 号) テーマ特集 こども・若者の活動動向・社会参画
エリア特集 岡山県・岡山市の社会教育（増大号 1485 円）128 頁

	特集 2 注目！シェア型図書館・書店	(普通号 968 円)80 頁
12 月号(954 号)	特集 GX と生涯学習・社会教育	(普通号 968 円)80 頁
1 月号(955 号)	特集 生涯学習論 2026～温故知新の視点から	(普通号 968 円)88 頁
2 月号(956 号)	特集 地域人材活躍の基盤整備 地域学の実践	(普通号 968 円)80 頁
3 月号(957 号)	特集 2025 年度の社会教育・生涯学習の総括と 2026 年度への展望	(普通号 968 円)80 頁

誌面構成については、この間の用紙代の上昇、印刷代の高騰、編集システムの変更などにより、34 年間継続してきた 96 頁体制から 80 頁体制へと変更しました。また、収支均衡のため、前年度から普通号の本体価格を 850 円から 880 円に値上げを行ったほか、増大号の本体価格を 1300 円から 1350 円に値上げしました。

<2025 年度>

	4月号	5月号	6月号	7月号	8月号	9月号
A 取次委託販売数	1,046	1,027	1,024	1,023	1,030	1,019
B 直接購読者送数	375	380	390	384	387	386
合計数	1,421	1,407	1,414	1,407	1,417	1,405
印刷部数	1,800	1,740	1,860	1,740	1,800	1,740

	10月号	11月号	12月号	1月号	2月号	3月号	合計
A 取次委託販売数	1,016	1,014	1,015	1,013	1,010	1,007	12,244
B 直接購読者送数	389	391	390	389	390	386	4,637
合計数	1,405	1,405	1,405	1,402	1,400	1,393	16,881
印刷部数	1,800	1,740	1,800	1,740	1,800	1,740	21,300

2026 年 3 月時点での購読部数は書店取次が 1,007 部（昨年同時期 1,080 部）、直接購読が 386 部（同 382 部）、合計 1,393 部（同 1,462 部）となっています。ここ数年の全国各地の書店数の減少に歯止めがかからず 10,000 店をкаろうじて維持しているのが現状であり、書店経由の購読の減少が続いています。一方、青年館から直接発送をしている定期購読直送分については、「微増」しています。今後は、直送分を拡大するような工夫により読者の拡大を目指します。

他方、2020年度からスタートした「社会教育士」は年々増加しており、購読拡大にむけ社会教育士に本誌への購読を促すプロモーションを実施しています。

2) オクトーバー・ラーニング等の実施

社会教育士が急増する中、10月にはオンラインと対面を交えた「オクトーバー・ラーニング2025」を企画・実施しました。期間中に7回開催し、延べ100名を超える方が参加しました。今後も定期購読拡大のため、定期的な「読者交流会」（オンライン）を開催するとともに、2026年7月号の創刊80周年記念事業などを通じて部数の拡大につとめます。

3) 社会教育の架け橋 大交流会 2025

10月18日にNYCにて標記事業を開催しました。参加総数は55名で、文部科学省の課長や社会教育実践研究センターの職員なども参加し、官民を超えた交流を生むことができました。

4. 青年問題研究所の活動と若者の調査研究

地域の青年集団を再生し担い手を育成することを目的に、地域における若者の集団的な活動に関する調査・研究を行うほか、地域青年活動のプラットフォームの役割を日本青年館が果たすため、有識者による統括会議で意見交換を行い、青年活動に関する調査・研究を行うとともに、それらを踏まえた研修事業や事例の発信を行ってきました。

1) 統括会議の開催と政策提言の作成

今年度の統括会議は7回開催され、主に若者の地域活動推進のための政策提言を作成するための議論を実施しました。そして3月に「若者の地域活動の支援・推進に向けた政策提言」を取りまとめました。

提言完成後は、青年団OBが首長や議員を務める自治体を中心に提言を行い、行政の若者施策への活用を促すほか、文科省やこども家庭庁への働きかけを行っていきます。

＜2025年度常任研究員＞

井口啓太郎	（国立市教育委員会）
岡下 進一	（元日本青年団協議会会長）
奥 ちひろ	（秋田県南 NPO センター）
島田 茂	（元日本 Y M C A 同盟総主事）
辻 智子	（北海道大学教授）
前田 昇	（認定 NPO 法人本の学校副理事長）

若者の地域活動の支援・推進に向けた政策提言（項目のみ）

- 1 なぜ私たちは政策提言を行うのか
- 2 本提言の基本的な視点・方向性
- 3 5つの政策提言

提言1 出会い・つながりのきっかけを創り、若者たちの活動を応援すること

- 1) 地域の中に若者の「居場所」が必要です
- 2) 仲間と出会い、リアルにつながり、社会とかかわる「出番」を応援してください
- 3) 若者たちのコミュニティや集団活動を支えることは地域の未来にとって不可欠です

提言2 若者たちの活動を支える環境を整備すること

- 1) 活動には自由で開かれた場所や拠点が必要です
- 2) 若者の視点から社会教育施設の機能を見直すことが必要です
- 3) 若者のための施設が不可欠です
- 4) 職員・スタッフの存在と役割が重要です

提言3 若者の参画を「当たり前」にすること

- 1) 若者のことや、まちのことを決める場に若者の存在と声が必要です
- 2) 地域の意思決定プロセスに若者が参画できる仕組みづくりを求めます
- 3) 主権者としての若者の学びを応援することも大切です

提言4 子どもから若者への成長を支えること

- 1) 子どもの学校外における自然・体験活動を積極的に支援すべきです
- 2) 子どもとかかわる活動は若者が成長する機会でもあります
- 3) 高校や大学による地域にかかわる教育と、若者活動の連携が重要です

提言5 若者政策を推進するための全国的なネットワークをつくること

- 1) 国・都道府県は市町村を財政や仕組みで支えることが役割です
- 2) 若者が地域活動に参加するために休暇制度や財政的支援の仕組みが必要です
- 3) 日本青年館は若者の交流促進とネットワーク拠点として役割を果たしていきます

2) SNS による発信「日本青年館 note」

6 月 11 日に岡山県の学生団体「SCoP」(岡山市)の取材記事を掲載しました。執筆者は岡山県青年団役員で昨年度の若者サミット実行委員の八木雅弘さんが務めました。また 9 月 25 日に北海道の八雲町「若人のつどい」についてまとめた取材記事を掲載しました。執筆は昨年度の全国まちづくり若者サミット実行委員長で元別府大学青年団長の下鶴賢太郎さんが行いました。

3) 若者施策担当職員オンライン対話会

10 月 9 日に、若者施策を担当する行政職員向けのオンライン対話会を実施しました。新潟県燕市で 2013 年から 10 年以上続いている「つばめ若者会議」について、燕市の樋山貴一さんから話題提供を行っていただいた後、グループトークを行いました。21 自治体から 23 名の参加があり、互いに抱えている課題の共有や、若者施策の在り方などについての対話を行いました。12 月 3 日に標記オンライン事業の第 2 回目を開催し、北海道から山口まで 19 自治体 23 名が参加しました。先駆的な活動をしている取り組みとして東京都中野区子ども教育部 子ども・教育政策課 子ども政策調整係の担当者から中野区若者会議の話題提供をいただいたのち、若者の巻き込み方、主体的な意思決定、世代交代、などの課題についてグループ討議を行いました

4) 第 70 回全国青年問題研究集会・全国まちづくり若者サミット 2026

(3 月 7 日～8 日 日本青年館)

「青年問題研究集会」(青研集会)は、1950 年代に日本青年団協議会が創造した、働く青年の生活課題の解決をめざす学習・実践活動を集約する集会です。1954(昭和 29)年に、勤労青年の教育のあり方、考え方として「勤労青年教育基本要綱」を策定した日本青年団協議会は、青年の自主的学習活動として「共同学習」運動を全国に呼びかけました。共同学習運動は、仲間づくりと話し合い学習を重視し、活動や生活の身近な問題を語り合う中から共通の課題を見出し、共同の力によって課題解決の実践に取り組むという、青年の主体性、自主性による実践的学習運動です。このような共同学習運動の全国的集約と発展的展開をめざす場として、日本青年団協議会は 1955(昭和 30)年から「全国青年問題研究集会」を開催しており、2023 年度からは「青年問題研究集会」(青研集会)を日本青年館が主催する「全国まちづくり若者サミット」と合同開催しています。

今年度も日本青年団協議会(日青協)の全国青年問題研究集会(全国青研)と若者サミットの合同開催とし、日本青年館と日青協の共催としました。また昨年度同様、青年団やその他の若者団体や学生団体など幅広い属性の若者たちの中から実行委員を募り、若者の手による若者のためのサミットを目指し実施しました。

6 月から実行委員会を開催し、18 回の実行委員会を 9 名の委員によって開催しプログラムを作り上げていきました。8 月末に清溪で合宿形式の実行委員会を開催したほか、1 月中旬には日本青年館で会場を見ながら 2 回目の合宿形式の実行委員会を開催しました。

＜実行委員会＞

宇佐原嘉晃(未来守・立命館アジア太平洋大学)、大松健祐(愛知県青年団協議会)
鴨志田早織(ひたち若者かがやき会議)、皿谷倖也(五霞町地域おこし協力隊・南陽青年団)、島貫旬人(南陽青年団)、下鶴賢太郎(元別府大学青年団)、富澤優希(國學院大学)、長谷川綾(福島県連合青年会)、文屋実(富谷市青年団)

参加者総数は 106 名（25 都道府県）。参加者内訳は、社会人 44 名、大学生 35 名、高校生 9 名、実行委員 9 名、登壇者 9 名。青年団は執行部を除いて 31 名が参加しました。交流会への参加も 100 名を超えました。



グループディスカッションの様子

今回のサミットのテーマは「語り合いからはじめよう ～つながりが紡ぐ私（まち）の価値創出～」とし、テーマに 3 つのねらいを込めました。一つ目

は参加者が十分に語り合う時間をつくること。二つ目は「まちづくり」に関する活動のヒントを見つけ出せること。最後に参加者同士がお互いを知り合い新たなつながりをつくること。年度当初に日青協との協議を経て、これまで以上にグループディスカッションの時間を確保し、実行委員のほか日本青年館および日青協役職員などが進行役に入ること、グループでの対話を促す役割を果たしました。

初日は自己紹介およびアイスブレイクを行い参加者がお互いに知り合う時間としました。その後ゲストトークとして、宮城県石巻市を中心に名物のホヤを全国に広げる活動をしているご当地アイドルともいえる“ほやドル萌江”さんから「私と“まち”の価値創出」をテーマにお話を伺いました。

その後「私と“まち”の現在位置」をテーマに自分や活動、住んでいるまちについて参加者同士が語り合うグループディスカッションを行い、さらにお互いの活動経験をもとに話し合いを行いました。

2 日目は、9 団体からの事例発表を聞いたのち、これから活動を継続するうえで感じている課題や可能性、発展に向けたヒントについてグループディスカッションを行いました。そして最後に、各自の気づいたことや今後の決意などをメッセージカードに書き込み、2 日間をともに過ごしたグループメンバー同士も、感想やアドバイスをメッセージカードにして送り合い、最後にメッセージカードを 1 枚の色紙にまとめて、色紙を見せあいながら、グループの中でお互い共有しあい 2 日間の学びを振り返りました。

<プログラム>

〔3 月 7 日〕

- | | |
|-------------|-------------------------------------|
| 13:00-13:15 | オープニング |
| 13:20-14:15 | 自己紹介・アイスブレイク（自分のまち人狼） |
| 14:30-16:15 | ゲストトーク ほやドル 萌江さん
「私と“まち”の価値創出」 |
| 16:15-17:55 | グループディスカッション①
「私と“まち”の現在位置」を理解する |
| 19:00-21:00 | 交流会 |

〔3 月 8 日〕

- | | |
|------------|--------------------------|
| 9:00- 9:15 | 1 日目の振り返り・事例発表に向けての整理 |
| 9:30-12:00 | 事例発表（各部屋に分かれて分科会方式で話を聞く） |

【グループ A：ルームイエロー】

- ①ひびのば（群馬県前橋市）
- ②竹田 T キャンプ（福井県坂井市）
- ③舞鶴町青年会（大分県大分市）

【グループ B：ルームブルー】

- ①土浦わかもののまちプロジェクト（茨城県土浦市）
- ②地域活性化団体のろし（千葉県市原市・埼玉県行田市）
- ③南陽青年団（山形県南陽市）

【グループC：ルームグリーン】

- ①Hope Creator（東京都国分寺市）
- ②はまだ協働学舎ファンタス（島根県浜田市）
- ③うるま市青年連合会（沖縄県うるま市）

12:00-13:00	昼食
13:00-14:50	グループディスカッション② 「これからの自分・まちのヒント探し」
15:00-15:45	2日間全体のまとめ
15:45-16:00	クロージング

5)「未来を担う、青年たちの挑戦×応援プロジェクト」について

今年度から開始した、地域で活動する若者たちに最大で100万円を助成する標記プロジェクトについて、助成決定した団体がそれぞれの事業を完了しました。岡山県の「ぼっけーまち会議」は助成金を利用して、耕作放棄地に植えるさつまいもや、ビール造りの大麦を購入し、子どもたちに農業体験の機会を創出したほか、地域の方との夏祭りの実施費用などに活用しました。

また、茨城県五霞町で青年団をつくる取組みでは、2月22日に「権現堂青年団」という名称にて、五霞町だけでなく広域での活動を目的とした青年団の結成式などに活用されました。結成式では、五霞町役場の関係者に加え、隣接する幸手市の行政職員や地域の方々も集い、新たな若者組織の誕生を共に喜ぶといった報告が寄せられています。

大分県別府市の「旅べっぷ」は、高齢化や人口減少により個人経営の飲食店や旅館が人手不足や後継者不在に直面している課題を解決するために、地域体験を報酬とするマッチングプラットフォームを企画しました。このプラットフォームでは、「まかない」や「温泉入浴」を報酬とし、人手不足を補いつつ地域の魅力を再発見することを目的としました。2月に飲食店と日帰り温泉施設で事業を実施し、参加した大学生はまかないや一番風呂体験といった体験を報酬として受け取り、別府市の魅力について再認識することができました。

4月から次年度の団体募集を開始するため、本制度を知ってもらおうと、若者サミット会場でのチラシ配布等を実施しました。

○2025年度助成金額一覧

岡山県	ぼっけーまち会議：助成額 84 万円
茨城県	権現堂青年団：助成額 30 万円
大分県	旅べっぷ：助成額 17 万 6690 円
合 計	131 万 6690 円

5. 図書・資料センターについて

戦前・戦後の地域青年団の活動資料を多数所蔵する当館の図書・資料センターは、財団設立4年後の1925（大正14）年に建物の竣工とともに付設されました。社会教育関係者はもとより、最近では歴史学や民俗学研究者、自治体史編さん関係者、メディア関係者など多くの方に利用され、貴重な役割を担っています。

1) 資料室の閲覧について

本年度の閲覧は24件、問い合わせは12件でした。内容としては、田澤義鋪関連の資

料、戦前地域青年団報、青年カードに関すること、終戦直後から日青協結成までの資料、青研レポート集などが閲覧されました。

これまで戦前資料の閲覧がほとんどでしたが、今年度は終戦直後から日青協結成前後までの資料閲覧も数件ありました。閲覧だけでなく学生の卒論執筆のサポートなど多様なリクエストに対応してきました。

―閲覧・問い合わせの内訳―

一般 8 件、研究者 15 件、大学院生・学生 7 件、青年団 O B 3 件、青年館役員 2 件、ジャーナリスト 1 件

2) 所蔵フィルム・写真の利用状況

2024 年以來、ラジオ放送が始まって 100 年や戦後 80 年を記念した番組に利用され、2025 年度もその傾向が続きました。青年館の所蔵フィルムを利用した番組は下記のとおりです。

使用映像	番組名	放送日	内容
日本青年館外観 写真、外観撮影、ホール外観・内観写真	テレビ朝日「世界アニマル&キッズ動画」	2025 年 4 月 8 日	4/8 ハチ公の日になみ、ハチ公の銅像制作のために日本青年館ホールで募金の会が開かれたことが紹介された。
我等の生活の中に	NHK 総合「映像の世紀バタフライエフェクト 戦時下の宰相たち」	2025 年 8 月 25 日	近衛文麿、東条英機、鈴木貫太郎の三人にスポット。激動の昭和を描く。ラジオ放送開始の頃を映した。
我等の生活の中に	NHK 総合「放送 100 年・戦後 80 年 戦争をどう伝えて行くか」	2025 年 8 月 10 日	二次利用。3 月に放送したものの、スタジオ出演者を替えて放送。
我等の生活の中に	NHK 総合 NHK スペシャル「新・ドキュメント 太平洋戦争 大日本帝国の分岐点（後編）」	2025 年 8 月 12 日	ラジオ放送が開始された頃の放送局や一般市民の家庭のラジオを聞く様子が紹介された。
鋤の光	NHK 総合「Dear にっぽん」	2025 年 8 月 31 日	中国残留邦人を受け入れる高知市の取り組み、残留邦人となった背景とその後の人生を描く。
鋤の光	NHK 甲府「News かいドキ」ニュース番組	2025 年 8 月 26 日	戦後 80 年特集。旧豊村満州開拓団が終戦後に集団自決した事件を追う。放送は山梨のみ。

夏山縦走登山講習会	NHK 富山放送局 ローカルニュース 「富山人」	2025 年 12 月 10 日	立山黒部アルペンルート の立山トンネルの工事映 像を流す際に使用。
我等の生活の中 に	「NHK スペシャル 新・ドキュメント太平 洋戦争 1942 大日本帝国の 分岐点（後編）」	2025 年 12 月 3 日	ラジオ放送が開始され た頃の放送局や一般市民 の家庭のラジオを聞く様 子が紹介された。

3) 戦前の地域青年団報のネット上での公開に向けて

日本青年館が所蔵している、戦前に発行された地域青年団の団報などを、多仁照廣敦賀短期大学教授（2004 年当時）が「地方青年団報と地域青少年教育の歴史研究」にまとめられました。そこには 47 都道府県・樺太、満州、朝鮮、台湾の約 12,600 件のデータが集積されています。今年度はこれら資料のネット公開に向けて作業を進め北海道・東北・関東の資料をプレ公開しました。2026 年度にはデータの精度を高め全地域の団報を公開していく予定です。

4) インターン受け入れについて

8 月 18 日～9 月 5 日にかけて、月・水・金の週 3 日の日程で、昭和女子大学の学生 2 名を受け入れ、資料の整理作業に従事していただきました。

6. 高校オーケストラ活動支援事業について

日本青年館で第 1 回目のオーケストラフェスタが開催されたのは 1995 年 1 月のことです。1998 年には全日本高等学校オーケストラ連盟が結成され、青年館と学校の先生と音楽家が協力し全国的なネットワークづくりと交流の場づくりに取り組んできました。

1) 第 8 回全国高等学校サマーオーケストラ

（8 月 11 日～17 日 山中湖旭日丘温泉ホテル清溪、ふじさんホール）

交響曲を作り上げるための実践的な指導を通じて、高い技術と音楽性を身につけるとともに、他校生徒との交流を深めることを目的に、日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の共催により 8 月 11 日～17 日の日程で標記事業を実施しました。毎年、募集開始と同時に定員締め切りとなっている状況を踏まえ、昨年度から A 日程(8/11-14) B 日程(8/14-17)の 2 日程で実施しました。応募開始と同時に定員を大きく超える 295 名のエ



終演後にパート毎に記念撮影。たくさんの友情が生まれました。

ントリーが殺到したため、高校 2 年生を優先するなどの基準を設けて参加者を決定しました。全国 47 校から 174 名(A 日程：28 校 87 名 B 日程：34 校 87 名)が参加しました。

各日程の最終日には一般公開にて富士吉田市のふじさんホールで特別演奏会を開催。モーツァルト作曲の歌劇《魔笛》序曲とドヴォルザーク作曲の交響曲第 9 番《新世界より》を演奏し 4 日間の成果を披露しました。

①参加者

A日程：8月11日（月）～14日（木）

全国28校87名

B日程：8月14日（木）～17日（日）

全国34校87名

②演奏曲 W.A. モーツァルト／歌劇《魔笛》序曲 K. 620

A. ドヴォルザーク／交響曲第9番 ホ短調 Op. 95 《新世界より》

成田為三／浜辺の歌（アンコール）

③講師 河地良智（指揮者、洗足音楽大学名誉教授・前同大学副学長）

辻 功（元読売日本交響楽団首席オーボエ奏者・国立音楽大学教授）

佐久間聡一（元広島交響楽団第1コンサートマスター・洗足学園音楽大学講師）

田渕 彰（洗足音楽大学名誉教授、元NHK交響楽団ヴァイオリン奏者）

江口心一（東京都交響楽団副首席チェロ奏者）

中山隆崇（東京都交響楽団トランペット奏者・洗足学園音楽大学非常勤講師）

岸本祐有乃（ゲスト・指揮者）

2) All Japan Jugend Orchestra ウィーン公演 2025 (AJJO)

日本青年館が高校オーケストラ支援事業のOB・OGたちの交流機会の創出と新たなネットワーク構築を目指し、大学生や社会人による「All Japan Jugend Orchestra (AJJO)」を結成しました。9月3日～9日の日程でオーストリアへ渡航しウィーン公演を実施。全国から70名が参加しました。

指揮者には田中一嘉氏を迎え、J. ブラームス作曲のヴァイオリン協奏曲と交響曲第1番を演奏しました。協奏曲のソリストにはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団ヴァイオリン奏者のルーカス・タケシ・ストラットマン氏を迎えました。さらにアドバイザーとして元広島交響楽団第1コンサートマスターで現在ソリストとして活躍するヴァイオリニスト佐久間聡一氏が指導に加わり現地に帯同しました。ウィーン・フィルハーモニー管弦



楽友協会グロースーザールでの演奏会、客席は2階席まで満員

楽団のニューイヤーコンサートでも知られる「ウィーン楽友協会 大ホール」において9月6日に単独公演を実施しました。1,700席の客席は2階席まで満員でアンコールの後には熱狂的なスタンディングオベーションが送られ、ウィーン市民から大変な好評を得ました。

公演プログラムにはウィーン市長のミヒャエル・ルートヴィヒ氏から挨拶文を寄稿いただいた他、当日はウィーン州議会議長のマリア・クリッカ氏が出席し演奏会の冒頭に挨拶するなど、ウィーン市の協力をいただくことができました。

参加者アンケートでは「このツアーでしか体験できない内容で、これまでウィーン公演を長年行ってきた青年館だからできるツアーだ」といった好評の声が多く寄せられています。今後のOB・OGネットワークの構築につなげていきます。

3) 第32回全国高等学校選抜オーケストラフェスタ

（共催：全日本高等学校オーケストラ連盟、一般財団法人日本青年館）

（12月25～28日 日本青年館ホール 2月13日～3月31日 オンライン開催）

日本最大の高校オーケストラの祭典「全国高等学校選抜オーケストラフェスタ」を12月25日～28日の4日間にわたり、日本青年館ホールで開催し全国82校76団体より3,839名が参加しました。(ホール参加：79校、オンライン参加：3校)。これまでのオケフェスタ参加生徒は延べ91,423名を数えます。各校から選抜された生徒によって編成される選抜合奏は、25・26日のA日程オーケストラが106名、弦楽アンサンブルが50名、27・28日のB日程オーケストラが106名、弦楽アンサンブルが50名の生徒によってそれぞれ編成されました。演奏曲目と指揮者は以下のとおりです。

＜選抜弦楽アンサンブル＞

演奏曲目 L.v. ベートーヴェン／弦楽四重奏曲第11番 ヘ短調 Op.95《セリオーソ》第1・4楽章(弦楽合奏版)

指揮者 永峰 高志(国立音楽大学教授 元NHK交響楽団首席ヴァイオリン奏者)

＜選抜オーケストラ＞

演奏曲目 W.A. モーツァルト／歌劇《魔笛》序曲 K.620

A. ドヴォルザーク／交響曲第9番ホ短調 Op.95《新世界より》第1楽章

指揮者 河地 良智(洗足音楽大学名誉教授・前同大学副学長)

岸本祐有乃(元洗足学園音楽大学非常勤講師、元桐朋学園音楽大学特別招聘講師)

一般来場者数は4日間で2,707名、選抜弦楽アンサンブル、選抜オーケストラの演奏の入場者数は683名。一般入場者は昨年度より410名増加し、オケフェスタの認知は年々向上しています。

年明け2月にはコロナ禍をきっかけに始まったオンライン開催を実施。遠隔地で参加が難しい学校はオンラインで動画を提出し、ホール参加校の演奏と選抜合奏動画と併せて2月13日～3月31日まで連盟の公式YouTubeチャンネルで公開しました。

①出場校 全国82校より3,839名 (ホール参加：79校 動画参加：3校)

※()内数字は出場回数

宮城県	宮城学院中学校高等学校	(24)	千葉県	東邦大学付属東邦中学校・高等学校	(13)
宮城県	宮城県宮城第一高等学校	(26)	東京都	明治大学付属中野中学・高等学校	(30)
宮城県	宮城県仙台第一高等学校	(22)	東京都	東京都立青山高等学校	(28)
宮城県	宮城県富谷高等学校	(16)	東京都	品川女子学院	(21)
宮城県	仙台育英学園高等学校・秀光中学校	(9)	東京都	東京都立駒場高等学校	(17)
宮城県	尚絅学院中学校・高等学校	(16)	東京都	田園調布学園中等部高等部	(13)
福島県	福島県立福島高等学校	(28)	東京都	明星学園中学校・高等学校	(31)
福島県	福島県立橋高等学校	(20)	東京都	明星中学校・高等学校	(31)
茨城県	清真学園高等学校・中学校	(30)	東京都	玉川学園	(17)
栃木県	栃木県立鹿沼高等学校	(18)	東京都	国際基督教大学高等学校	(24)
栃木県	栃木県立栃木女子高等学校	(22)	東京都	恵泉女学園中学・高等学校	(10)
群馬県	群馬県立桐生高等学校	(29)	東京都	東京都立西高等学校	(13)
群馬県	群馬県立中央中等教育学校	(19)	東京都	大妻多摩中学高等学校	(10)
埼玉県	春日部共栄中学高等学校	(32)	東京都	東京都立南多摩中等教育学校	(13)
埼玉県	埼玉県立浦和西高等学校	(29)	東京都	東京都立富士高等学校・附属中学校	(6)
埼玉県	埼玉県立川越女子高等学校	(19)	東京都	豊島岡女子学園中学校・高等学校	(8)
埼玉県	浦和明の星女子中学・高等学校	(17)	東京都	桐朋女子中学校・高等学校	(7)
千葉県	千葉県立幕張総合高等学校	(28)	東京都	晃華学園中学校高等学校	(2)
千葉県	千葉県立千葉中学校・千葉高等学校	(30)	東京都	東京都立八王子東高等学校	(2)
千葉県	千葉県立千葉女子高等学校	(32)	神奈川県	清泉女学院中学高等学校	(14)
千葉県	千葉市立稲毛高等学校・稲毛国際中等教育学校	(29)	神奈川県	関東学院中学校高等学校	(19)
千葉県	国府台女子学院中学・高等部	(23)	神奈川県	森村学園 中等部・高等部	(20)
千葉県	光英 VERITAS 中学校・高等学校	(32)	神奈川県	慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部	(15)
千葉県	千葉県立船橋高等学校	(23)	神奈川県	神奈川県立川和高等学校	(17)
千葉県	千葉県立津田沼高等学校	(26)	神奈川県	神奈川大学附属中・高等学校	(23)
千葉県	成田高等学校・附属中学校	(24)	神奈川県	日本女子大学附属高等学校	(14)
千葉県	千葉県立小金高等学校	(16)	神奈川県	聖光学院中学校高等学校	(16)
千葉県	市川中学校・高等学校	(14)	神奈川県	洗足学園中学校高等学校	(9)

神奈川県 捜真女学校中学部・高等学部	(9)	長野県 松本秀峰中等教育学校	(11)
神奈川県 鎌倉女学院中学校高等学校	(7)	岐阜県 岐阜県立大垣南高等学校	(16)
神奈川県 東海大学付属相模高等学校	(5)	静岡県 静岡県立清水南高等学校・同中部	(14)
神奈川県 神奈川県立光陵高等学校	(3)	京都府 京都女子中学・高等学校	(30)
神奈川県 桐光学園中学高等学校	(2)	京都府 ノートルダム女学院中学高等学校	(14)
新潟県 新潟県立高田高等学校	(18)	大阪府 大阪府立清水谷高等学校	(17)
山梨県 山梨県立甲府第一高等学校	(8)	奈良県 帝塚山中学校・高等学校	(8)
長野県 長野県長野高等学校	(30)	岡山県 岡山県立岡山朝日高等学校	(22)
長野県 長野県小諸高等学校	(20)	岡山県 岡山県立岡山城東高等学校	(7)
長野県 長野県上田高等学校	(25)	広島県 広島大学附属中・高等学校	(22)
長野県 長野県須坂高等学校	(17)	広島県 山陽女学園中部・高等部	(17)
長野県 長野県長野西高等学校	(17)	長崎県 長崎県立長崎北高等学校	(初)
長野県 長野県屋代高等学校	(17)	熊本県 熊本県立熊本高等学校	(2)

②講師

河地 良智（洗足学園音楽大学名誉教授・前同大学副学長）
永峰 高志（国立音楽大学教授・元NHK交響楽団首席ヴァイオリン奏者）
田渕 彰（洗足学園音楽大学名誉教授・元NHK交響楽団ヴァイオリン奏者）
馬込 勇（平成音楽大学教授・東邦音楽大学講師）
辻 功（元読売日本交響楽団首席オーボエ奏者、国立音楽大学客員教授、洗足学園音楽大学教授）
名雪 裕伸（元東京フィルハーモニー交響楽団フルート奏者・国立音楽大学講師・洗足学園音楽大学講師）
久保 昌一（NHK交響楽団首席ティンパニ奏者・東京音楽大学教授）
中山 隆崇（東京都交響楽団トランペット奏者・洗足学園音楽大学非常勤講師）
佐久間聡一（元広島交響楽団第1コンサートマスター・ウィーン隊OB）
熊井 優（神奈川フィルハーモニー管弦楽団ホルン奏者）
岸本祐有乃（元洗足学園音楽大学非常勤講師・元桐朋学園音楽大学特別招聘講師）
荒井 光子（打楽器奏者）

③オンライン開催実績（集計期間：2026年2月13日～3月31日）

視聴回数：471,640回
視聴時間：3,770時間
チャンネル登録者数：2,779名(+221名増加)

④協賛・後援団体

特別協賛：株式会社ニッセイ（日本青年館ホール）

協 賛：株式会社黒澤楽器店、株式会社文京楽器、株式会社アルシェ、島村楽器株式会社、株式会社下倉楽器、弦楽器専門店イル ヴィオリーノ マジコ、東京音楽大学、東邦音楽大学、国立音楽大学、武蔵野音楽大学、昭和音楽大学、聖徳大学聖徳大学短期大学部、上野学園短期大学、尚美学園大学、株式会社フォトライフ、株式会社ソナーレ、株式会社伊藤園、FV ジャパン株式会社、鹿島印刷株式会社

後 援：文部科学省、全国高等学校長協会、日本私立中学高等学校連合会、一般社団法人全国高等学校PTA連合会、高文連全国器楽・管弦楽専門部、読売新聞社

4) 全日本高等学校選抜オーケストラ・オーストリア公演 2026

(共催：全日本高等学校オーケストラ連盟、一般財団法人日本青年館)

3月23日～3月29日の日程で「全日本高等学校選抜オーケストラ・オーストリア公演」を実施。全国の音楽を愛する中高生による選抜オーケストラを組織しオーストリアの音楽の都ウィーンを訪問しました。

参加者は中高校生 55 名・連盟理事 3 名・保護者 7 名・日本青年館 1 名・撮影班 1 名、看護師 1 名、添乗員 2 名、指揮者 1 名の総勢 71 名でした。



楽友協会ブラームスザールでのリハーサルの様子

公演に先立ち、第 1 回国内

練習会を 2 月 21 日～22 日、国立オリンピック記念青少年総合センターで実施しました。また、3 月 20 日より山中湖畔荘ホテル清溪で 2 泊 3 日の直前合宿を行った後、夕方に羽田空港を出発しオーストリアへ向かいました。

プログラムについては、ドヴォルザークのチェロ協奏曲の全楽章、メインにはドヴォルザークの交響曲第 9 番《新世界より》全楽章を演奏し、昨年に続きフルプログラムの演奏会となりました。

ソリストにはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団チェロ奏者のヴォルフガング・ヘルテル氏を招いてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地である楽友協会のブラームスザールで実施しました。当日客席は満席で大盛況のうちに演奏会を終えることができました。さらに翌日には、ウィーンフィル等に在籍するプロの演奏者との交流会も開催しました。

①コンサート・交流会概要

■3月26日(水) 全日本高等学校選抜オーケストラ・コンサート

会場：楽友協会ブラームスザール

曲目：A. ドヴォルザーク／チェロ協奏曲 ロ短調 Op. 104

A. ドヴォルザーク／交響曲第 9 番 ホ短調 Op. 95 《新世界より》

成田為三 浜辺の歌 (アンコール)

■3月27日(木) 昼食交流会

会場：ラートハウスケラー (市庁舎レストラン))

参加者に事前にメンバーの詳細は伝えずサプライズ演出でウィーンフィルで活躍する音楽家が登壇し生演奏を披露しました。

[演奏メンバー] フルート : リュック・マンホルツ
ヴァイオリン : パヴェル・クツミシェフ
ヴィオラ : マティアス・ヒンク
チェロ : ヴォルフガング・ヘルテル
[演奏曲] W. A. モーツァルト／フルート四重奏 全楽章
J. ブラームス／子守歌

5) オーケストラ交流会 in 大阪 の開催

(主催：全日本高等学校オーケストラ連盟、後援：一般財団法人日本青年館)

オケフェスを中心としたオーケストラ事業をさらに全国に広げ、幅広いネットワークをつくる

ことを目指し、未加盟校の多い関西方面の高校生オーケストラを対象に3月20日に大阪で標記オーケストラ交流会を実施しました。関西一円の高校オーケストラが日頃の活動の成果を発表し交流しました。

- ・日時 2026年3月20日(金・祝)
- ・場所 堺市民芸術文化ホール フェニーチェ堺
- ・出場校 大阪府立高津高等学校(弦楽)
大阪府立槻の木高等学校(弦楽)
大阪府立豊中高等学校(弦楽)
大阪府立三国丘高等学校(弦楽)
帝塚山中学校・高等学校(弦楽)
- ・主催 全日本高等学校オーケストラ連盟
- ・後援 一般財団法人日本青年館 大阪府高等学校芸術文化連盟器楽管弦楽部会

7. 地方自治の推進

1) 第30回清溪セミナーの開催

地方自治体の若手政治家の研修・交流の場として実施してきた本セミナーは、青年団出身の若手政治家の手によって1997年2月に第1回目が開催されました。本セミナーの特色として、全国から選出された実行委員による自主的な運営であること、参加者の声を活かし時宜を得たテーマを設定し、本セミナーの趣旨をご理解いただく専門の講師をお招きしていること、超党派であることが挙げられます。



講義Ⅵ 第30回記念対話の様子

30回目を迎える清溪セミナーを、10月22日～23日に開催し、全国各地の地方議員117名(オンライン参加を含む)が参加しました。今年度の特徴として、町村議員の参加費を下げたことにより、例年に比べて町村議員の参加が多く見受けられました。

30回の記念となる今回は、これまで取り上げてきたテーマを今日的視点で改めて学ぶプログラムを企画しました。記念対話として、昨年度ノーベル平和賞を受賞した日本原水被害者団体協議会代表委員の箕牧氏から提供された映像の紹介と、広島市の松井市長の講義及び広島県出身の実行委員と松井市長との対談を実施しました。

<10月22日>

講義Ⅰ 「現場から見た介護保険制度」

講師：小島 美里 氏(NPO法人暮らしネット・えん代表理事)

講義Ⅱ 「社会の変化とこれからの学校教育～主体性と当事者性～」

講師：工藤 勇一 氏(教育アドバイザー)

講義Ⅲ 「子育て支援策の一步先へ～まち全体での子育て～」

講師：奥 正親 氏(岡山県奈義町長)

<10月23日>

講義Ⅳ 「人口減少社会を生き抜くために」

講師：増田 寛也 氏(株式会社野村総合研究所 顧問)

講義Ⅴ 「自治体の防災マネジメントと議会・議員の役割」

講 師： 鍵屋 一 氏

(跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 まちづくり学科 教授)

講義Ⅵ 「被爆戦後 80 年 核兵器のない世界へ日本が果たす役割とは」

講 師： 松井 一 實 氏 (広島県広島市長・全国市長会会長)

2) 清溪セミナー現地視察

1 月 26 日～27 日の 1 泊 2 日で清溪セミナー実行委員による現地視察を実施、千葉県木更津市を視察し、道の駅「うまぐたの里」や、1 月にオープンした庁舎を見学、教育長から教員研修の内容と効果についてなどの話を伺いました。実行委員会も同時に開催し、2026 年 10 月に開催する第 31 回清溪セミナーのテーマや講師案などについて意見交換を行いました。

3) 清溪フォーラム行政懇談会

7 月 31 日、日本青年館 8 階会議室にて清溪フォーラム行政懇談会を実施しました。

当日は、会長である、宮城県大崎市の伊藤市長、山梨県甲斐市の保坂市長、宮城県富谷市の若生市長が参加したほか大西理事長、佛木常務、山本理事、元黒部市長の大野氏や元南陽市長の塩田氏も参加しました。

会議では、日青協の棚田事務局長から青年団の取り組みを報告したほか、PPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ＝官民連携）にて建設・運営している明治公園の取り組みと視察を、運営者である東京建物様のご協力を得て実施しました。

9. 青年活動の継承・交流

1) 全国青年団 OB 会

(1) 第 43 回総会・滋賀大会

6 月 8 日～9 日の日程で開催された、全国青年団 OB 会総会・滋賀大会は、全国から 26 道府県 141 名、滋賀県内から 90 余名、総勢 230 名を超える参加者を得て、琵琶湖グランドホテル京近江を会場に盛大に開催されました。

開会式は、全国青年団 OB 会小野寺喜一郎会長の主催者挨拶、滋賀県青年団 OB 会藤田治夫会長の歓迎の言葉で幕を開けました。来賓として滋賀県知事の三日月大造様、滋賀県議会議長で滋賀県青年会館理事長でもある目片信吾様、日本青年館大西倉雄理事長、日本青年団協議会杉山和義会長からご祝辞をいただいたほか、滋賀県教育委員会村井康彦教育長、滋賀県青年団連合会富長弘宣会長にご出席いただきました。

総会では、1 号議案「2024 年度の事業報告・会計報告」、2 号議案「2025 年度の事業報告」が承認されました。3 号議案の役員改選では引き続き小野寺喜一郎会長が全国 OB 会のかじ取りを行う新役員体制が承認されました。第 4 号議案の大会アピールは、滋賀大会実行委員会副委員長も務めた全国青年団 OB 会福永晃仁常任幹事より提案をいただき、「青年・若者が希望を持って暮らしていける社会をつくろう」をテーマにしたアピールが拍手で承認されました。引き続き行われた記念講演は、大本山石山寺第 53 世座主鷲尾龍華師を講師に迎え、『紫式部ゆかりの石山寺と地域活動』と題してお話を伺いました。

夜の交流パーティー、二日目の琵琶湖クルーズと石山寺参拝などを大いに楽しみ、石山寺門前の「洗心寮」で行われたお別れ昼食会で成功裏に幕を閉じました。

今大会の開催にあたっては地元滋賀県青年団 OB 会および 60 名におよぶ実行委員会が 1 年半

にわたり入念な準備を進められたほか、現役青年団員が積極的に運営に携わる場面も多い大会となりました。

次回大会は岡山県倉敷市で 2026 年 10 月 4 日～5 日に開催される予定です。

(2) 全国青年団OB会賞について

日本青年団協議会の地域青年実践大賞にて、宮崎県西米良村青年会の活動「第 29 回新春やまびこロードレース大会」が全国青年団OB会賞に選定され、賞状と副賞を授与しました。

2) 田澤義鋪記念会

田澤義鋪（1885（明治 18）年～1944（昭和 19）年 日本青年館第 5 代理事長）は、25 歳で静岡県安倍郡長として青年団にかかわります。その後内務省明治神宮造営局総務課長として、明治神宮の造営にあたり青年団の労力奉仕を建議。明正選挙運動にも多大な貢献をしました。

こうした田澤義鋪の残した民主的平和的な社会教育上の精神と業績を伝え、その実現に努めることを目的に、毎年田澤義鋪記念会を開催しています。

今年度は、個人 65 名、13 団体より会費が寄せられました。

(1) 第 80 回田澤義鋪記念会総会

第 80 回田澤義鋪記念会総会は、全国青年会館協議会理事長会と合同で 10 月 31 日～11 月 1 日の日程で開催しました。2025 年は日本青年館開館 100 年、田澤義鋪生誕 140 年、柳田國男生誕 150 年という節目の年でした。

講演では「田澤義鋪が描いた民俗学と青年のつながり」と題して、丸山泰明氏（神奈川大学准教授・日本常民文化研究所所員）よりお話をいただきました。大正末期から昭和 12 年頃まで、田澤義鋪が日本青年館において一番活躍していた時代の大きな功績の一つは、青年と民俗学のつながりであったといえます。初代日本青年館の開館記念事業として開催された「郷土舞踊と民謡の会」では、柳田國男が審査顧問を務めるなど、丸山先生は田澤と柳田國男が日本青年館を舞台にどのような取り組みをし、青年たちにどのような影響を与えたかについて話されました。

翌日 11 月 1 日の明治神宮鎮座祭へは、田澤会、大九報光会、全国青年会館協議会理事長会、の総勢 35 名が参列しました。

(2) 田澤会通信の発行

「田澤会通信」No. 191 を 3 月 23 日付けで発行しました。11 月に行われた総会の報告に加え、静岡顕彰会から報徳会（勤労・奉仕・親孝行の実践を尊ぶ尊徳思想の普及をすすめる団体）の会報に田澤義鋪作詞の「貴く生きん」が紹介されたこと、また、田澤義鋪記念館（佐賀県）からは、田澤生誕 140 年を記念して取り組まれた記念式典の報告を寄せていただきました。

(3) 田澤義鋪賞の授与

日本青年団協議会の地域青年実践大賞の審査会が 2 月 17 日に行われ、「田澤義鋪賞」には高知県青年団協議会の「高知家モリモリプロジェクト～竹編～」が選定されました。地域課題の放置竹林の整備を行いながら地域との連携を進める内容が評価されました。3 月 21 日～22 日にて開催された日青協第 3 回理事会において賞状と副賞を授与しました。

3) 大九報光会

明治神宮造営に際し、全国の青年団が労力奉仕にあたり、そのことがきっかけとなって日本青

年館は誕生しました。その造営の労力奉仕に参加された方々が 1950 年（昭和 25 年）11 月 1 日、明治神宮御鎮座 30 年祭に参加された折、そのことを記念して大九報光会を結成しました。「大九」とは、明治神宮御鎮座の年、大正九年に由来し、さらに耐乏生活に耐え、光明と希望に生きる耐久生活にもかけて命名されたものです。今年度は田澤義鋪記念会および青年会館協議会とともに 11 月 1 日に実施された明治神宮の秋の大祭に参列しました。

4) 全国青年会館協議会

(1) 全国青年会館協議会総会

7 月 9 日～10 日の日程で、沖縄県青年会館において全国青年会館協議会総会を実施し、9 会館より 17 名が参加しました。今年度は理事会館の改選期にあたり、2025 年度から 2027 年度までの 2 か年にわたる新たな理事会館が選出されました。当日は、現在の建物管理に関する課題や、公益事業などの課題に加えて公益目的支出計画の進捗についても情報交換が行われました。翌日は戦後 80 年の節目でもあり、南風原陸軍病院跡や平和公園など、沖縄の戦跡を視察しました。

(2) 栃木県青年会館 50 周年記念式典への参加

5 月 24 日に開催された、栃木県青年会館 50 周年記念式典に、大西理事長、佛木常務、松尾総務部長が参加しました。当日は、福田知事や国会議員も多数参加するなど多くの方で賑わい、盛大に開催されました。

(3) 鹿児島県青年会館 50 周記念「鹿児島の郷土芸能・ふるさとの祭り」への参加

9 月 7 日に開催された標記事業に、大西理事長、佛木常務、松尾総務部長にて出席しました。当日は、神事や郷土芸能の披露が行われたのち、会館設立 50 周年を記念した懇親会が開催されました。

(4) 全国青年会館協議会理事長会

10 月 31 日から 11 月 1 日にかけて、全国青年会館協議会理事長会を開催し、11 会館 16 名が参加しました。

初日は、田澤義鋪記念会総会と合同開催とし、神奈川大学丸山泰明准教授より「田澤義鋪が描いた民俗学と青年のつながり」と題して講演いただきました。その後、(公財)公益法人協会理事・業務部長である竹井豊氏より「新たな公益法人会計の概要と法人としての対応」として、2025 年 4 月より改定された新たな公益法人会計への対応について学習しました。翌日は、田澤義鋪記念会、大九報光会の方々と共に明治神宮の秋の大祭に参加しています。

9. 国際活動

中日青年交流センターは、1984 年、当時の中曽根康弘内閣総理大臣と中国の胡耀邦総書記との共同発意により、日中友好 21 世紀委員会が、その建設をそれぞれの政府に提唱し、日本政府の無償資金協力と中国政府の資金により 1991 年共同プロジェクトで建設された施設です。以来、日本青年館は施設の運営等について支援・交流するため、中日青年交流センターから研修生を受け入れるなど施設間の交流を続けてきました。

国際交流事業については、コロナ禍により事業が途絶えて以降、具体的な交流事業のあり方について関係団体との合意形成には至っていません。今年度は、カウンターパートである中日青年交流センターの担当者変更に伴い、今後の連携に向けた情報交換を行いました。具体的な交流事

業の実施には至りませんでしたが、次年度以降の交流再開の可能性を見据え、今後も連絡協議を継続していきます。

10. 後援・協力事業

今年度、日本青年館が依頼を受けて後援・協力をした事業は下記のとおりです。

1) FORUM in 国際音楽の日 2025 大阪

(主催：全国生涯学習音楽指導員協議会)

※後援名義使用

2) 第 51 回太陽美術展

(主催：太陽美術協会)

※後援名義使用、日本青年館賞提供

3) オーケストラ交流会 in 大阪

(主催：全日本高等学校オーケストラ連盟)

※後援名義使用

11. その他寄付者一覧

今年度、その他ご寄付いただいた皆様です。

水野 美代子 様

梅澤 耕一郎 様